

551.781(524) : 550.8

雨竜炭田昭和・雨竜両炭礦の各主要夾炭層に対する私見 (予報)

須 貝 貫 二*

Résumé

A Tentative Opinion on the Paleogene Main Coal-bearing Formations along the Horoni-Tachibetsu River in the Uryū Coalfield.

by

Kanji Sugai

The main coal-bearing formation of the Uryū Coal Mine (Asano coal-bearing formation) has been considered upper than that of the Shōwa Coal Mine (Uryū coalbearing formation), both belong to the Paleogene Tertiary. The writer considers that the both above-noted coal-bearing formations may be the same. The rock facies including coal seams of the former resembles very much to that of the upper half (from II low coal seam to VII coal seam) of the latter. And both resemble to the Bibai coal-bearing formation too.

There develops a dark grey colored, almost homogeneous and massive siltstone or silty mudstone about 120 m in thickness, and it contains many small marine shells such as *Paphia* under the above-noted coal-bearing formation of the Uryū Coal Mine. It resembles to the Wakkanabe fossil-containing formation in Sorachi district, too.

On the other hand, there develops also a dark grey colored and massive siltstone or silty mudstone lower than the main coal-bearing formation of the Uryū Coal Mine. It is more than 20 m in thickness (lower limit has not been ascertained) and it also contains marine shells such as *Paphia* (?)

This mudstone may be correlated with that of the lower half of the Uryū coal-bearing formation and with the Wakkanabe fossil-containing formation.

There are many important geological problems on the coal-bearing Paleogene Ter-

tiary in the district along the Horoni-Tachibetsu river. These must be solved by a detailed geologic survey as soon as possible.

1. 序 言

雨竜炭田はかなり古くから幾多の先学によつて論じられ、その地質構造の複雑なことなどのために、北海道において問題の多い炭田の一つである。最近、西田彰一氏等によつて留萌 雨竜炭田の層序問題について検討が加えられ、また北海道炭鉄技術会地質部会によつて上記炭田の総括的な炭層対比問題がとりあげられ、着々その成果を挙げつつある。

筆者もまた石狩炭田空知地区の石狩層群と、雨竜炭田特にここで言及しようとしている幌新太刀別川東岸地域ホロニタチベツの夾炭古第三系との関連性について、従前から深い関心を抱いているものの1人である。幸い昭和25年の末に、浅野雨竜炭鉄雨竜鉱業所及び明治鉱業昭和鉱業所の好意によつて、数日間両鉱業所の主要夾炭層を坑内において観察することができた。

以下上記坑内視察の結果に基づいて、両鉱業所の各主要夾炭層特に両者の対比について、予報的に私見を述べてみたい、しかしながらこの坑内視察は文字どおりの視察であつて、詳しく柱状をとつたわけでもないの、未だ確言するまでに至らないものであることを特に附記しておく。

2. 昭和鉱業所の主要夾炭層(雨竜夾炭層)

今回筆者が観察したのは、一番層から七番層までの地層であるが、同鉱業所から提供された資料をも考慮して以下述べてみよう。

この地域の古第三系の基盤岩層は上部アンモナイト層であつて、その上に不整合に主として淤泥岩及び泥岩から成つている厚さ数 10 m の地層が重なり、更にその上に一番層が賦存している。この一番層は同鉱業所における礫行炭層の一つで、同層中にはいわゆる白帯と称する凝灰質? の厚さ数 cm の淡灰色泥質細粒砂岩の薄い夾みが介在していることは注意を要する。

この一番層の上には厚さ約 120 m のほぼ均質な泥質岩の厚層が発達して、この中に *Paphia* 等のような比較的小型な海棲化石が多数含まれていることもまた注意に値する。

* 北海道支所 燃料課長

この顕著な泥質岩層の上に、二番下層から七番層までの多数の有望炭層を挟有している厚さ約 280 m の砂岩と頁岩との互層が整合して重なっている。この互層の下部と上部とに炭層の発達が良い。下部は普通のアルコース砂岩を主体としているが、中部になると次第に帯褐灰色の菱鉄鉍質泥岩の band を多数挟有するようになる。更に上位においては、美唄夾炭層に特有な美しいいわゆる縞砂岩となり、その上に上部の炭層群が賦存している。

この炭層群に属する各炭層は、いくらかずつ灰白色乃至灰色の凝灰質? 細粒砂岩乃至淤泥岩の薄い夾み(厚さ数 cm) を挟んでいて、いわゆる虎ノ皮式と呼ばれている様相を示している。

かの *Amyrnodon Watanabei* (TOKUNAGA) を産出した帯青灰色砂岩は、層位上明らかに上述の夾炭層の上位である。

3. 雨龍鉍業所の主要夾炭層(浅野夾炭層)

ここで言及するのは、もつばら末広坑の坑内において観察される主として四番層(下位)から一番層(上位)までの地層についてである。

この地層を坑内で瞥見して、各炭層の細かい柱状図にはかなりの差があるとしても、この地層が上に述べた昭和鉍業所の二番下層から七番層までの地層によく似ていることは否定できない。即ち、炭層が両者とも各夾炭層の上部と下部とに主として賦存しているし、砂岩の性質が層準に應じて互によく類似しており、上部の炭層群の各炭層がほとんど凝灰質? の細粒砂岩乃至淤泥岩の夾みをもっている。

またこれら両層の下位には、前者においては既に言及したように、厚さ約 120 m の泥質岩があり、後者においても、雨竜鉍業所の熊田長太郎氏に拠れば、20 m 以上(下限不明)の顕著な泥質岩が発達しているとのことである。

しかも同氏によれば、両者の岩質がきわめてよく似ているとのことである。筆者が視察した時は、雨竜鉍業所のこの泥質岩が観られるという坑道が崩れて入坑不能であつたため、この泥質岩を観察することができなかつた。

なお、筆者が視察を終えて帰郷してから、熊田氏からこの泥質岩からかつて採取したという小型の海棲介化石を送附してきた。この標本はわずか1箇ではあるが、とにかく雨竜鉍業所の主要夾炭層の下位の泥質岩中に、このような海棲介化石が含まれていることは注意に値しよう。

4. 対 比

最近、雨竜鉍業所の主要夾炭層は浅野夾炭層と呼ばれ

て、昭和鉍業所の主要夾炭層(雨竜夾炭層)の上位に五ノ沢砂岩層を隔てて重なるものと解されているが、筆者は既に上に述べた事実に基づいて、前者は後者の二番下層から七番層までの地層に該当するのではあるまいかと疑うものである。

そして既に先学によつてある程度試みられているように、これらの両主要夾炭層(昭和鉍業所においては二番下層から七番層まで)は石狩炭田空知地区の美唄夾炭層に、その下位の海棲介化石を多数含んでいる泥質岩層は若鍋含化石層に対比され、更にその下位の一番層は茂尻夾炭層最上位のいわゆる白帯を挟んでいる炭層に対比できるように思われる。

つまり、幌新太刀別川流域における含炭古第三系は、いわゆる若鍋海進によつて、その先駆ともいべき茂尻夾炭層の中一上部でもつて始まつたのではあるまいか。

他方、従来の考えとして、昭和一浅野炭山間の幌新太刀別川沿いには、浅野夾炭層とみなされている夾炭層が褶曲及び断層によつて数回くりかえして露出しているとされているが、これが果して浅野夾炭層なのか、即ち雨竜鉍業所の主要夾炭層に該当するものか、あるいはまた同夾炭層の上位の砂岩層中に属するものなのか、これまた疑わしい点がある。つまり、この夾炭層が空知地区の高根夾炭層(羊齒砂岩層)に該当するのではないかと疑うからである。

このように、幌新太刀別川流域の含炭古第三系については、未だ多くの地質学的に重要な問題が未解決のままのこされているように思われる。筆者の以上の私見もその中の一つであつて、既にことわつてあるとおり、この私見は未だ確信のあるものではなく、單に筆者が最近氣附いた1,2の問題を提起して、将来これらを解きほぐしてゆかなければならないことを強調するものである。

附 記

擧筆するにあつて、視察中多大の便宜を與えられた浅野炭砒株式会社雨竜鉍業所次長森田太郎、同所小林一雄・星島完・高橋勘作・熊田長太郎・柴田重勝の諸氏、及び明治鉍業株式会社、昭和鉍業所所長原佐多夫、同所松原喬・佐々木勇、同社地質課長柴田勇の諸氏、並びに種々貴重な助言をいただいた北海道大学佐々保雄氏に対して厚く御礼申し上げる。なお三井鉍山株式会社 堤正俊氏から、同氏が最近上記両鉍業所を調査された際の両者の主要夾炭層に対する対比上の見解を承わつた。それが筆者の抱いている私見と一脈相通するものがあることをここに明記して、同氏の好意に対して謝意を表する次第である。(昭和25年調査)